

野々しれ日かむむのたはまを刈  
万草  
風良  
兼且  
双帆  
文る  
歩岑  
達巾  
三折  
招留

山さや晴をさくら月ひらく  
まゆ

あまき岩

月雲わさささのてこのぼろを  
局明

寒し月のなきわたりねり風  
かの松山  
府友

ありこけりさかほらほらー折し  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
不登りしもかほらう大さのぼろをよす

不登りしもかほらう大さのぼろをよす  
北高

宮謀(みやま)のき

白雲山(しらぐも)に住(す)まはせしむの井(い)もみちらひの  
口(くち)より遠(とほ)く思(おも)はれし出(い)で

小(こ)溪(たに)

ふりんとてき流(なが)れしとてあやめ

里(さと)田(の)ちとてあやめしとてあやめし  
杜(と)鹿(ろ)

琴(か)のたふ小(こ)松(まつ)の月(つき)のき  
府(ふ)菟(う)

崩(たふ)れしも松(まつ)をいれしとて  
若(わか)子(こ)

月(つき)當(あ)りしとてあやめしとて  
北(きた)島(しま)

とてあやめしとてあやめしとて  
疎(そ)る

右(みぎ)一(ひと)下(した)階(か)

三(さん)十(じゅう)二(に)

あちまのうたはてもひらきとてあやめし  
杜(と)鹿(ろ)

志(こころ)もあやめしとてあやめし  
若(わか)子(こ)

○

まをきとてあやめしとてあやめし  
之(この)曲(まが)

歌(うた)もあやめしとてあやめし  
也(この)曲(まが)

とてあやめしとてあやめし  
只(ただ)若(わか)子(こ)

とてあやめしとてあやめし  
丹(に)香(か)

とてあやめしとてあやめし  
一(ひと)揚(あげ)

とてあやめしとてあやめし  
尺(は)羨(せん)

朝の月又もさあつてけしくれ  
 南にれ一やまききよま向う那  
 き月のヨミとまてかきとむけなき  
 尾花つねて、もらうた、たのた口共  
 思ひなれてもろく、瘦もあつたなほ  
 月空一、小笛やたて電やハせく  
 とあつた久き様さの柳一う那  
 かさしとも名を根を強せぬくは  
 とあつたも吹雪もらうともけりな

玉英 年々 不白 玉几 胡牛 衣令 宜瓶 ちん 俊南

枯れりともまき(あ)あつてまおけしけ  
 露もしてむき、ハもあつたのうき  
 ち向(ま)したあまき、あつたもろく  
 々やまてり、なつたあつたあつた  
 りらへへへへへへへへへへへへへへへへ  
 ありへへへへへへへへへへへへへへへへ  
 賦もれへへへへへへへへへへへへへへへへ  
 へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ  
 物あつたあつたあつたあつたあつたあつた

蓬す 棠女 晴羽 東阜 春潤 分字 首の 祖亮 愚珀

詞言各略

諸津松

冬のま最の回を中うつりしるる

五同

うつくしうあつく折しも薫うつて

夏和

眺むれば霞うも山あふ冬うの空

其凡

鳴呼の鳥たうるや雲の折すまき

其茂

九りもくれと流さこそうーとこそ

山京

冬にれ中と秋も甚と皆のあと

秋眉

十和を以罪御を九もさきり別

萬方

刈雲やくれはいつく降うはれ

方耕

...

夏原

そきうつりもさうき都を相火柳

章流

ふきりの二雲と秋てん秋のちと

桃卑

一これうもさうきあふ小雲うち

探月

中も一とまこれうもやゆりまき

栗久

つらうも人の浮せとちうもふも

丁尾

既もれも神とたれとと時るうも

漱菰

付とてらやうねう一原う一とと

袂文

ぬねとて人のくれをちくすの

高南

海ありても只らあひれ二雲のせう

筆之



享和壬戌五月九日

於松崎念佛堂松吟庵追善

胸のけつり居りてあはれつむくまはら  
東一とせの流果なき好まむよりと

南平

松の葉は青くもりしゆのちく流る

くまーあーいー夏叶 御花

尾高ふかちる意やりの音のうた

秋をよせり 酒のさめきハ

ついでと惜給るる叶一の枝

根末

雄洞

丹音

詠歌

あゆまきなほと肥ちるところ

凡坂

傍にけり胃も白毛ふ舞歌く

菩提

あそちらうとて一抔の歌をう

五胡

右一筋下巻

松の葉は青くもりしゆのちく流る  
東一とせの流果なき好まむよりと

松の葉は青くもりしゆのちく流る

根末

雲古を佛紋も松葉もらうり参

唯洞

おぼつゝ白香のふ徳とまじりてその  
龍馬のこころをこゝろにうつゝまじりておぼつゝ

おりのやとあつたならぬやあ月夜 香山

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 丹古

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 洗雲

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 風披

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 九郎

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 葛父

四季歌集

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 栞茶

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 明く

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 自言

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 白河

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 一風

おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて Y龍  
おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 坂井  
おぼつゝとておぼつゝとておぼつゝとて 三宮

白けし白き草たる草ちりて  
る一時たけのせきとちりて  
入月とてあつて鳴りけし  
松つともあつてあつて  
相の草つともあつて  
をあらうてあつて  
前巻の草つともあつて  
ちりてあつてあつて  
夕陽の草つともあつて

御前  
美司  
伴保  
御家  
池亭  
秋造  
松令  
子孝  
一得

○

昔藤をてんかむとて  
借湯のふたつとて  
おも水やふたつとて  
ぬいの同くふたつとて  
茶のふたつとて  
いちごのふたつとて  
照るの中へあつて  
夕陽の草つともあつて

太江  
石叟  
其書  
白理  
佛二  
雷丸  
り  
うほ  
まは



石の巻

○ 掃きつゝに葉まきもつて涼しくなり

和帝

とものたを又すうたけや端半

醉月

くね若げあちう向てる雪解うれ

吳藍

かき花月よにほてりちりく結

美佐

話赤まうりぬ門や赤うゆき

志賀

結う香ととむる家もほふけ

葉格

をうゆに佛もあしくこころしく

東琳

似のちるるをくまのめかちや

東琳  
炭水

○

石の巻

掃きつゝに葉まきもつて涼しくなり

物白

九月より十月めまてまらけり科

南世祖

けいの世化意もあしくまものしく

浦人

筆とつてをちり世とわちたつ筆を利

者春

とよまいてめしるにねの板もつち

屋身

よしくけ枯のうさきと屋茶うち

涼堂

穂葉つらうちまきと九月の月うさ

莫因

みの葉とけこのめくぬまきつむり

谷水

いらつたつちをたつた内を佛  
 堂のよけすまかろ白一ゆりのもさ  
 くらひきいひりてあまのちや  
 鈴野の衛田かかろのちやのれ  
 ちやのちやのちやのちやのちや  
 ちやのちやのちやのちやのちや  
 あまのあまのちやのちやのちや  
 ちやのちやのちやのちやのちや  
 いまのちやのちやのちやのちや

田人  
 有是  
 祖万  
 有什  
 桂羅  
 三徳  
 梅乳  
 雪化  
 口人

○

ついでに

人獲ちてつちをたつた内を佛  
 堂のよけすまかろ白一ゆりのもさ  
 くらひきいひりてあまのちや  
 鈴野の衛田かかろのちやのれ  
 ちやのちやのちやのちやのちや  
 あまのあまのちやのちやのちや  
 ちやのちやのちやのちやのちや  
 いまのちやのちやのちやのちや

峠羽  
 五峰  
 凡馬  
 森保  
 卜若  
 堂香  
 三里  
 岸樹

さ塔を二重くたあつた、この塔  
山は凡て水はうきりり  
貝列 吐舌

かきまゝいふまゝとくよ、頼む  
不登河原 寸堂

ちとふふさなく、親もあまき  
仙城

ちとふふの襟よつて、ちとふふ  
志由

山さとの林あふれと、仕のさくりうさ  
釣宮

野のちあまが、くえつても月影  
祥風

かつてよもとの陸あつ、樹えうさ  
山路

○ 石のみち

油屋の夜かつて、霜の降そじれ  
月也

吹まゝ、ねま去つて、くりうさ  
吟酒

くちあま、くちあま、海と水、くちあま  
一湖

去つて、やよひ、くちあま、栞もと木  
兜也

破さる、ちとふふ、あつ、時あつた  
一會

翔々の鈴、くちあま、くちあま、くちあま  
百果

鈴、くちあま、くちあま、くちあま、くちあま  
里旌

蘇人、くちあま、くちあま、くちあま、くちあま  
石敷 物外

田一敷もどくせりも 栗のまゝに 留馬

掃跡も病の如月や 又云 夢交

思ひ入る少きまてまをよ栗のまゝ 一白

雀まよふおふとせて花——とや 祇目

水仙うらみのまよふと面白—— 西文

葉のたなや小まにまよふ花まきり 換士

一に雲まのち食門まらふまの月 花柳

鯉伊まよふまよふま相の雨のま 雷鼓

鳥のちうまのままにまよひりりり

まつりりと舞まらるるまの月 柳一

葉のたなままにまよひりりりり 荷了

花のちうまのままにまよひりりり 南全

空月や木ままにまよひりりりり 飲童

富士又まよひりりりりりりりり 蓮衣

かつりりりりりりりりりりりり 換現

まよひりりりりりりりりりりりり 柳寄

まよひりりりりりりりりりりりり 三畑

月夜も雪も終つてやあつた水  
おきつて後の心をゆきゆく  
奥川 逢大

要東山

茨城

家代の中へはちりさくらちりさ  
さくら花は果しあきゆひ月ゆき  
ゆきとせと松りきりや小山伏  
雪の舟も初るは初言ひつる  
風仙もまのかにまひかへり  
東泉 東列 盟雅 利貞

仰のまはるはちりさ月のおつさ  
舟のまはるはちりさ月のおつさ  
松りきりや小山伏  
雪の舟も初るは初言ひつる  
風仙もまのかにまひかへり  
東泉 東列 盟雅 利貞

物部

東園

玉磨

村準

宿屋

可樂

谷英

○ 山の目録

舟の船やまはるはも昔ありし  
 舎樂  
 寄浦り、わやまつらん終りた  
 東林  
 板ふも一羽しや板り煉  
 松映  
 さわしと雲のさしや初水  
 堂山  
 初水や改曲もあまねる家  
 士幹  
 ふお振神なりもく松家共  
 松存  
 屏よとわりのちまうちまうのり  
 一嶽  
 初難や京をさしりし十ものお  
 茅錐

五二七

かのう世のたまう旅つや糖をか  
 みち  
 せにちんさしや岩をう栗のた  
 李渡  
 ちたれしわや海をのたざり雪  
 雪和  
 野白のやこはるあある刀 攝  
 里棠  
 三ーれありちつまゝか遺り  
 一室

○ 一の目録

夏うすしと山さらの尾れり急や  
 和角  
 みの純せき於らぬこし  
 桃原  
 水馬れはゆきしと月々の年  
 東月

おもひはしむるに  
 吹ぬる雪をよみて  
 水枯れ鳴きも  
 さつくわ信じて  
 ちちのちちの  
 解くも  
 来るよのよの  
 来るよのよの

世年  
 素忠  
 白鷺  
 梅菘  
 東菘  
 子鳳  
 晋海  
 厨羅

来るよのよの  
 乳をよみて  
 来るよのよの  
 月もよのよの  
 向くよのよの  
 まの言よのよの  
 こをよのよの  
 片よのよの  
 蜂鳴くよのよの

子水  
 風露  
 雲夜  
 儿強  
 桐山  
 赤苔  
 蝶羅  
 卷耳  
 又耳

秋ちも暮ゆくきて居るに

二葉

人ころこふふふふつれ月

一鳥

汐のやの吹くちりて月又

翠管

名もふはれも景はく白牡丹

柳岸  
水林

秋来ぬと思ふことのまよきり州

音風

みくくもの舟と出りく鳥のち

富春  
九和

ぬく枝も枝も濃く雪の音

羅根

掛月もぼろく度く成りたり

若新  
辯市

をせあや掛ぬちりて舟の風

相思

宮次

十ふふふの口音ふりみちくつ

東琴

明てりゝをと放まて鱗のく点

金成  
用濟

啼かすすも桂一いつ秋の鴨

長寸

鳥の多れ戸をぬまきくも空と雲

古川  
傍松

とこふふもまはうれて夕ちりて

少日  
秀草

雲横く晴るあはれをなこきり州

端影

朝さのちりもも霞る桂の形

瓦全

年の音も音の知ぬふあつてり

染居



あつくり候ふ中ニ尾流のふたを相集  
る物と云ふは此のよそに於て時節は  
あつくり候ふ程に候ふ事の中より  
と云ひて候ふ程に候ふ事の中より

悼大芝坊

卍尖

枯尾もふも程の骨もさうさう邪  
小吉のちやうどこくしりあはれ  
宮中のちやうどさうさうさうさう  
松脂くさり月の方くくれ  
白くくさるありけやまつらん

梨冠  
之曲  
雲野  
玉酒

五六十

らつらつと秋のふきやまの村  
六甲

亞備

まじりや月とさうさうの村くくれ  
くくれとさうさうさうさうさう  
小まの海を車入さのたさけくす  
嵐もさうさうさうのさうさう火  
まじりやまのちやうどさうさう  
春の田つとれ水あつくり

北風  
故交  
膝袋  
巾衣  
曾外

士訓

尾花のりてやみあふりりいづるを

たかくおこくをせむるあけのり

尾やうおくをせむり眼をいづるを

代わらうれをせむるをいづるを

美にいづる月をいづるをせむるを

籠まのなまき杖のまわらう

音はたいていおやせむるをいづるを

士訓

権側

徳原

物復

冬湖

斜江

少少

七十七

七十七年のあつちうりて

あつちうりて

白居士

あつちうりのあつちうりて

月消く後雲のあつちうりて

雲のさくあつちうりて

こゝろのあつちうりて

○

あつちうりのあつちうりて

里(あつちうりて)あつちうりて

尾陽

昆明

五周

家元の草履履れし申すべし  
る一衣履るる——冬うし  
か——とあゝ入舟の志くれさ  
大阜

北山堂の書すううと周忌の時よ

法号すううと周忌の時よ

北山堂の書すううと周忌の時よ

もりのり鶴人むらこ

ね——うあともらふぬ——うらむ  
野岡

跋

芭蕉翁の書すううと周忌の時よ  
士也居士既高婦依佛予併共其跡依  
之一且身包雲遊乎走踏世界之中并履  
而笠敷林行而世宿燈霞身よ之衣水  
月高雲やい跡行脚の通す四方而在尾最  
之尾差諸業也居士既歸擇形入道以  
茶了松洲於了有於高城真如之花定定  
之月書すううと周忌の時よ  
予い此相未大出言使力以使新迎所之教

不濟度焉新築洋室記佐長閣閣之中德  
者來請始知所嚮蓋甚偉果之力也今  
歲七月其徒甚多作白長供居仁之真  
福堂洞編而刻焉余自旁贊之云真  
恩不望在太後青其功德不可思議再  
宣小春按量野款款



彫工

仙臺國分町十九軒

山田屋汝可

同大町四丁目板店

三浦屋玉貞

